

水俣病新認定の29人



認定は当然のこと

家族に早く暖かい手を

沈痛の
石田さん

の二の舞いは越え過ぎたくなじ」と話していた。

一方、チツソは、一応防犯された人と話し合うことになつたが、いまのところ中竊習ひ込みの方針は変えていない。(東京本社)

東京・すわり込み組と現地の表情

金に強ひて、したし
(夏草を)

一家5人が患者に

江郷下
さん
最後までが
んばる

「認定。ああ、そ
うですか」長い苦
しみに耐えてきた患
者たちはこれまた「認定されて当
たり前」といった受けとめ方だ。
一家で患者五人となったのは、月
浦の漁業江郷下真満さん(男)と湯
紫の漁業岩坂政喜さん(男)の二家
族。「一生ける人形」と形容され湯
紫の兄リハビリテーションに入院中
の松永久満宇さん(三)の父、月浦
さん(五)も認定され、一家四人が

水俣

患者になった。

江郷下さん(左)は、妻スマさん(右)三男一娘さん(三)を四男(一)さん(五)五女(一)さん(三)がすでに認定されており、いま、チツソを相手取って訴訟中。真満さんは昨年から漁を休んでいるが、もともと左手にしびれがあり、冷たい感触があつた。目がよく見えず、耳も遠くなっている。訴訟中の江郷下さんは「いまさら早く補償金をもらおうとは思わぬ。ここまで来た

ので最後までがんばる」と話す。一と子ども三人(うち二人は死に)岩坂さんも江郷下さん同様、妻一が認定され、一家の柱の政喜さん(五)が認定された。日ごろ手足のケイレンを訴えていたが「一家の柱が倒れてたまるか」と認定申請を延ばしていた。

水俣漁地でのすわり込み組では月浦、池田ナツエさん(三)が認定された。松永市さんは一任派。「まだ認定申請者がいることでもあるし、そろそろ態度を決めなくてもいいと思ふ」と語る。このように認定患者の中には訴訟派、一任派、すわり込み家庭の

三つの派がある。今後の補償交渉は複雑になりそう。水俣病は今後一体全体、どうなるんしょうか」こんな市民の声も聞かれた。



苦しみを語る江郷下さん夫婦。これで一家5人が患者になった